

依頼場面における中国語を母語とする日本語 L2 使用者の 言語逆行転移

姫 宇禾

1. はじめに

一般的に、言語転移は L1 あるいは既習の言語から習得中の言語への影響と考えられているが、言語間の影響はこのような一方通行とは限らない。習熟度の高い L2 学習者やバイリンガルの場合、反対に L2 の言語の特徴が L1 を使用する際に影響を与えることも考えられる (Kecskes & Papp 2000)。

一方、人間は社会的な存在として、日常生活において誰かに何かを頼んだり、頼まれたりすることが頻繁に行われている。清水 (2009) では、依頼というのは生活で欠くことのできない言語活動と言われ、中間言語語用論研究においても、しばしば研究対象として取り上げられてきた (浜田 1995、李 2002、関口 2007 など)。しかし、これまでの「依頼」に関する中間言語語用論研究の大半は、母語と第二言語の影響の方向は母語から第二言語に限定されており、言語転移の双方向性、特に第二言語が母語に及ぼす影響に焦点を当てる研究は少ない。

そこで本研究では、「依頼場面」における言語逆行転移について調査を行う。

2. 先行文献

Cook (2003) は「逆行転移 (reverse transfer)」を「第二言語から第一言語への影響」と定義している。語用論レベルの言語逆行転移に関する研究は Blum-Kulla (1990)、Blum-Kulla&Sheffer (1993)、Cenoz (2003)、山田 (2010) などがある。

Blum-Kulla (1990) と Blum-Kulla&Sheffer (1993) により、ヘブライ語に堪能なアメリカ人に依頼調査を行い、イスラエル人のパターンともアメリカ人のパターンとも異なり、独特の依頼の規範を作り出していることを明らかにしている。

また、Cenoz (2003) は英語に堪能なスペイン語話者と英語の習熟度が非常に低いスペイン語話者を対象に調査した結果、英語に堪能なグループは英語の習熟度が低いグループより、相手のファーストネームを呼びかける頻度が高く、直接的な表現を使用する頻度が低く、間接的なストラテジーを多用するなど、第二言語の学習は母語の語用に影響を与えていることを明らかにして、第二言語の学習で得た語用に関する言語能力は L2 使用者の頭の中で一つのシステムとして母語にも第二言語にも作用していると指摘している。

山田 (2010) は英語に接触する頻度の異なる日本人大学生の断りの発話行為を調査した結果、英語に接触する頻度の高いグループの選択した断り表現には、断る相手との距離の変化に応じて断り表現の丁寧度を変化させる傾向が見られないという点に、学習言語であるアメリカ英語での断り方の影響が窺えると報告した。

Cook (1991) はマルチコンピテンス (multicompetence) という概念を提出し、この

概念では、母語と第二言語の言語知識（文法・語彙など）が一人の頭の中で別々に存在するのではなく、複合されて存在するとしている。よって、言語転移の双方向性、及び第二言語が母語に対する影響に着目した研究も重要な意味を持っていると思われる。先行研究は、ここ十数年間で少しずつ増えてきているが、未解明な部分が多く、村端・村端（2016）では「質・量、両面からみれば、その研究はまだ萌芽期にあるといってもよい」と逆行転移に関する研究を評している。

そこで、本稿では先行研究を踏まえながら、中国語を母語とする日本語L2使用者が依頼場面での言語逆行転移について考察することを目的とする。

3. 研究概要

3.1 調査対象

本調査の対象者はCC（日本語学習歴のない中国語母語話者）、JFL（中国国内にいる中国語を母語とする日本語L2使用者）、JSL-1（日本滞在2年以下の中国語を母語とする日本語L2使用者）、JSL-2（日本滞在2年以上の中国語を母語とする日本語L2使用者）、JJ（中国語学習歴のない日本語母語話者）はすべて20代の大学生か大学院生であり、JFL、JSL-1、JSL-2は日本語学習歴2年以上かつ日本語能力試験N1の中国語母語話者である。各グループの調査参加者はそれぞれ30人、合計150人である。

3.2 調査方法

Kasper&Schmidt（1996）は語用論的能力に関して、文脈としての社会・文化的要因の作用を強く受けるので、外国語学習（JFL）より第二言語学習（JSL）の環境のほうが促進されやすいと指摘している。一方、日本語の会話では、相手との親疎・上下関係など社会的要因の影響を受け、マツモト・工藤（1996）では個人主義の文化の人々と比べ、集団主義の文化の日本では人々は自分の属している集団内部の関係、地位の異なる人の上下関係により注意・関心を払うと指摘されている。そのため、本調査は、聞き手の話し手に対する親疎関係・上下関係及び調査参加者属性という2つの変数を組み合わせてデザインした。聞き手の話し手に対する親疎関係・上下関係は、対等な関係で親しい（友人）、対等な関係で親しくない（あまり話したことのないクラスメイト）、上下関係で親しい（親しい先生）、上下関係で親しくない（面識のない先生）の4水準とし、調査参加者の属性はCC、JJ、JFL、JSL-1、JSL-2の5水準とした。依頼場面の内容はすべて「レポートの作成に必要な本を借りる」といった学生がよく遭遇しそうな場面にした。

各場面で自分ならどう依頼するかを調査参加者に答えてもらい、質問紙に選択し、記入してもらった。質問紙は、日本語版質問紙と中国語版質問紙の2種類があり、日本語母語話者には日本語版質問紙、中国語母語話者には中国語版質問紙に答えてもらった。日中両版の質問紙は内容が同じであり、多肢選択アンケートと談話完成テストとを組み合わせて作成したものである。また、調査参加者の選択によって会話の展開が変わる。

多肢選択アンケートの問題例を以下に示す。

あなたはレポートを書くために『現代日本語』という本が必要ですが、図書館にはなく、仲の良い友達を持っていることが分かりました。友達に頼んでください。

あなた：ねえねえ、_____

A: ちょっと相談したいことがあるんだけど、今いい？

B: ごめんね、ちょっと相談したいことがあるんだけど、今いい？

C: 『現代日本語』という本、貸して。

D: ごめんね、『現代日本語』という本、貸して。

E: 『現代日本語』という本、借りてもいい？

F: ごめんね、『現代日本語』という本、借りてもいい？

G: その他：_____

談話完成テストの問題例は以下に示す。

友達：うん、いいよ。どうしたの？

あなた：_____ (本を借りたい理由を書いてください)

3.3 分析方法

関口 (2007) の意味公式を参照し、質問紙から得られたデータから依頼ストラテジーを表1のように分類した。

表1 依頼ストラテジーの分類

依頼 ストラテジー	機能	例文
予告	依頼することを予告したり、話題の方向付けをしたりする表現。	「相談したいことがあります。」 (有件事想和你商量。)
直接依頼	直接に相手に動作を依頼する表現。	「本を貸してください。」 (请借我一本书。)
間接依頼	希望、願望表現、相手に選択肢を与える表現。	「本を借りてもいい？」 (可以借我一本书吗?)
負担軽減	相手の負担を軽減するために強制しない表現。	「ご都合が良ければ……」 (如果方便的话……)
お詫び	謝罪表現。	「申し訳ありません。」 (不好意思)
感謝	感謝表現。	「ありがとう。」 (谢谢)

また、SPSS19 を使用し、二元配置分散分析の方法で分析を行った。多肢選択アンケートのデータを分析する際、自由度 (F)、有意確率 (p 値)¹ と効果量 (η^2)² を見て言語転移を検定していく。

一方、会話完成テストの結果を分析する際、データにおける特別な表現を抽出し、言語逆行転移の可能性について検討を試みる。しかし、日本語学習以外に、日本語 L2 使用者の発話が影響する要素も考えられるため、あくまでも非常に可能性の高い推定であり、ほかの要素を否定し排除しているわけではない。

4. 結果および分析

本章では、依頼場面における語用論的言語逆行転移、及び、データにおける言語逆行転移の実例について考察を試みる。

4.1 依頼場面における語用論的言語逆行転移

ある言語の語彙や文法体系に熟達しても、相手に対して失礼なことやふさわしくないことを話してしまい、誤解が生じることがある。この問題の要因の一つとして語用論的能力が考えられる。本節では、L2 の日本語の熟達度が高い中国語母語話者は母語で依頼する際、発生した語用論的言語逆行転移について報告していく。

まず、属性と予告ストラテジーの関係性を表 2 に示す。

表 2 属性と予告ストラテジー

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率	η^2
対比	459.700	4	114.925	8.253	0.002	0.340
誤差	167.100	12	13.925			

結果は $F(4, 12) = 8.253, p = 0.002 \leq 0.01, \eta^2 = 0.34$ (効果量大) で、属性の 5 つの水準の間に高度な有意差が得られた。すなわち、属性によって、予告ストラテジーの使用が異なるということが明らかになった。本調査では、CC は予告ストラテジーの使用が少なく、依頼する前に予告する傾向が見られなかったが、日本滞在経験のある JSL-1 と JSL-2 のグループは、友人を相手に本を借りる場合を除き、「有件事想和你商量」(相談したいことがあるんだけど) などの表現を多用し、JJ のグループと同じく依頼する前に予告する傾向が見られた。ゆえに、予告ストラテジーの使用上で言語逆行転移が発生したと言えよう。

¹ 有意確率: ある結果が偶然発生する確率。p 値 ≤ 0.05 (有意差があり、言語逆行転移の可能性が考えられる); p 値 ≥ 0.05 (有意差がなく、言語逆行転移が起らなかった)

² 効果量: 効果の大きさ、実験的操作の効果や変数間の関係の強さを表す指標。 $\eta^2 = 0.01$ (効果量小); $\eta^2 = 0.06$ (効果量中); $\eta^2 = 0.14$ (効果量大)

また、直接依頼ストラテジー、間接依頼ストラテジーの使用と属性の関係性を示したのが表3である。

表3 属性と直接・間接依頼ストラテジー

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率	η^2
対比	128.300	4	32.075	8.649	0.002	0.331
誤差	44.500	12	3.708			

その結果、 $F(4, 12)=8.649$ 、 $p=0.002 \leq 0.01$ 、 $\eta^2=0.33$ (効果量大) で、属性の5つの水準の間に高度な有意差が見られ、属性によって、直接依頼ストラテジー、間接依頼ストラテジーの使用が異なるということが明確となった。関口 (2007) で、中国語母語話者は依頼する際に直接傾向があるのに対して、日本語母語話者は間接的に依頼する表現を多用すると指摘している。しかし、本調査では、どのグループでも間接依頼ストラテジーを使用する傾向があった。とはいえ、日本滞在歴の長いJSL-2が相手を目上の人とする場合直接依頼ストラテジーを全然使わず、他のグループより間接的に依頼する傾向が強かったため、直接依頼ストラテジーと間接依頼ストラテジーにおいて言語逆行転移が起こった可能性が考えられる。

次に、負担軽減ストラテジーの使用と属性の関係性を示したのが表4である。

表4 属性と負担軽減ストラテジー

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率	η^2
対比	88.800	4	22.200	3.784	0.033	0.243
誤差	70.400	12	5.867			

その結果、 $F(4, 12)=3.784$ 、 $p=0.033 \leq 0.05$ 、 $\eta^2=0.24$ (効果量大) で、属性の5つの水準の間に有意差が見られ、属性によって、負担軽減ストラテジーの使用が異なるということが認められた。本調査では、JJが負担軽減ストラテジーを使用する傾向が見られた一方、CC、JFLとJSL-1が依頼するときに負担軽減ストラテジーの使用が少なく、日本滞在歴の長いJSL-2だけJJと同じく負担軽減ストラテジーを使用する傾向が見られた。したがって、JSL-2については負担軽減ストラテジーの使用において言語逆行転移が発生したと思われる。

なお、感謝ストラテジーの使用と属性の関係性を示したのが表5である。

表5 属性と感謝ストラテジー

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率	η^2
対比	66.700	4	16.675	2.730	0.079	0.409
誤差	73.300	12	6.108			

F (4, 12)=2.730、 $p=0.079 \geq 0.05$ 、 $\eta^2=0.41$ (効果量大) で、属性の5つの水準の間に有意差が見られなかった。つまり、属性によって、感謝ストラテジーの使用が異なるということではなく、言語逆行転移が起こらなかったと考えられる。

最後、お詫びストラテジーの使用と属性の関係性を示したのが表6である。

表6 属性とお詫びストラテジー

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率	η^2
対比	268.700	4	67.175	7.457	0.003	0.428
誤差	108.100	12	9.008			

その結果、F (4, 12)=7.457、 $p=0.003 \leq 0.01$ 、 $\eta^2=0.43$ (効果量大) で属性の5つの水準の間に高度な有意差が認められた。よって、属性によってお詫びストラテジーの使用が異なるということが明らかになった。本研究では、CCの依頼ストラテジーにおいて、感謝の表現が多用されているが、お詫びの表現はあまり使用されていない。しかし、日本滞在歴の長いJSL-2は、目上の先生を相手として本を借りる場合、JJと同じく、お詫びのストラテジーを使用する傾向が見られた。よって、お詫びストラテジーの使用上に言語逆行転移が発生したと考えられる。

4.2 言語逆行転移の実例

本節では、談話完成テストへの返答において特別で、言語逆行転移だと思われる例を挙げて検討したい。

- (1) 这本书都没有。 (JSL-2・友人)
訳文：この本はない。

現代中国語では「没有」は動詞「ある」の否定を示し、存在しない、持っていないという意味を表す。また、発話する際、存在しない、持っていないものが「没有」の前に来るのは一般であるが、例1では、日本語の語順と同様に、「没有」が語末に来てしまっている。このような現象は日本語学習による影響と推測した。

- (2) 然后找您借这本书想。 (JSL-1・面識のない先生)

訳文：この本を借りたいと思います。

また、中国語では「想」の後に、動詞と名詞など具体的内容を表す言葉が来るのが一般的であるのに対し、例2では、日本語での「と思う」述語文の構造と同じ、「したいと思う内容+想」になってしまい、「想」が最後に出てきていることから、逆行転移の可能性があると推測した。

例1と例2は両方とも標準的な中国語の語順と異なり、日本語の語順と似ていて、語順の面で独特な表現を示している。しかし、個人差や地域の関係で、日本語学習経験のない中国語を母語とする人でもこのような話をする可能性があるため、簡単に逆行転移と認定してはいけない。それゆえ、2人のJSLに語順に関して、フォローアップインタビューを試みた。「うちの故郷では、このような語順が逆になった話を言う人が多く、自分でも、語順のことにあまり注意しなくて、いつも自由に話しているんだ」(JSL-2)、「よく覚えてないけど、中国にいた時に、たまに逆語順で話をすることもあるかなー、でも、この前WeChatで母とビデオ通話したところ、よく倒置法で話すようになったねって言われちゃった」(JSL-1)。上記のように、2人とも日本に来る前にも逆語順で話をしてきた。特にJSL-2の調査参加者は、倒置法をよく使う環境で育てられたことから、発話の語順が逆になったのは日本語からの逆行転移であるとは判断できない。一方、JSL-1の調査参加者は中国にいたときに、逆語順で話すことがたまにあったが、日本に来た後、語順が倒置されることが多くなり、日本語学習と日本語環境による影響を受けたと判定できるだろう。

(3) 谢谢你拜托了。 (JSL-2・友人)

訳文：ありがとう、お願い。

(4) 谢谢，拜托了。 (JSL-2・親しい先生)

訳文：ありがとうございます。お願いします。

中国語の「拜托了」という言葉は、ある事をしてくれるよう頼むときによく使われ、「お願いします」に訳すことが可能である。しかし、日常生活でも頻繁に使われる日本語の「お願いします」と比較すると、中国語の「拜托了」はよりフォーマルな場合あるいは重要なことを頼むときに使うのが一般である。日本語の教科書に早い段階で導入されており、また、日本語環境に長期間滞在したことによって、パターン化した「お願いします」が日本語L2話者の母語に影響を与え、依頼するときに自然に「拜托了」を言うようになるという言語逆行転移が起きたと推測できる。続いて、他の特別な表現を分析していく。

(5) 太感谢了，我得到了很大的帮助！ (JSL-2・親しい先生)

訳文：どうもありがとうございます。大いに助けてくれました。

(6) 谢谢您，对我有很大帮助。 (JSL-2・親しい先生)

訳文：ありがとうございます。大変助かりました。

「帮助」は日本語の「助ける」と同じ意味を表し、動詞として使用することが多い。一方、名詞の「帮助」は少しフォーマルな表現で日本語の「援助」「助け」に近いものである。例5では「帮助」を名詞として使い、動詞「得到」と接続しているが、「帮助」を使って感謝を表すときにこの表現はほとんど使われず、「您给了我很大的帮助」（大いに助けてくれました）のほうが自然である。例5のような表現が産出された理由として、母語の中国語がL2の日本語の授受表現に影響を受け、「助けてもらう/助けをもらう」を連想し、母語の使用に誤用が起きたと推測でき、言語逆行転移が発生したと言えよう。

また、例6においては言葉の誤用はないが、特別だと思われる原因は主語の欠如にある。日本語では主語を省略する習慣があるのに対して、中国語では主語がないと完全な文にならないこともある。中野他（1997）は中国人学生の日本語作文を分析した結果、主語が省略されるべきではないところで、省略されてしまうという例が多かったことを発見し、「中国人学習者にみられる主語の省略しすぎは、おそらく日本語教育現場で主語無用を強調しすぎたことから起こった現象だろう」と指摘している。例6も日本語に影響を受け、主語を省略してしまっているが、この文を「这对我有很大帮助」（大変役に立ちました）に直した方が自然である。

5. 言語逆行転移の要因に関する考察

前章では、依頼場面における言語逆行転移の実態について分析を行った。本章では、言語逆行転移に影響する要因について考察していく。

① 第二言語レベル

これまで、言語逆行転移の研究デザインで一般的な比較方法は、第二言語がよくできる人と、そうでない人の言葉や行動を比較することである。したがって、重要な変数となるのが第二言語レベルの差で、多くの場合、能力さのある二つのグループを調査対象としている（Cook et al. 2006 など）。しかし、本研究では、依頼場面での語用論的言語逆行転移について考察してみた結果、日本語学習歴2年以上かつN1に合格した第二言語レベルの比較的に高いJFLが依頼する際、言語逆行転移があまり起こらなかった。第二言語レベルが言語転移、言語逆行転移に影響を与えるのは否定できないが、第二言語レベルはただ言語能力に限らず、語用論能力も含めて考え、この第二言語レベルの基準をより明確にする必要があると思われる。

② 母語と第二言語の類似

言語転移に影響する要因として母語と第二言語間の類似点と相違点がよく挙げられる。佐野（2011）では、単純な2言語の構造的類似性で全ての転移を説明することはできないが、母語と第二言語の言語特性が類似している時に、言語転移が生じやすい

という事実は否めないと述べられている。本研究において、「这本书都没有」（この本はない）のような、標準的な中国語の語順の異なる一方、日本語の語順と同じの発話が見られた。発話者に聞いた結果、逆語順の表現を使用した日本語 L2 使用者は日本語を学習する前にもたまたま倒置法で話すことがあるが、日本に来た後、語順が倒置された母語での発話がより多くなったことが分かった。逆語順で発話する習慣のある母語環境で育てられた日本語 L2 使用者のほうが SOV 型³の日本語に影響されやすいことから、母語と第二言語の類似点も言語逆行転移に影響している可能性も考えられる。

③ 第二言語環境での滞在歴

L2 使用者がどれだけ長い期間を第二言語環境で過ごしているかも言語逆行転移に影響する要因の一つと思われ、目標言語への接触頻度が高いと思われる第二言語環境の L2 使用者の場合、言語逆行転移が起こりやすいと指摘している (Kasper & Blum-Kulla 1993 など)。本研究において、「我得到了很大的帮助」（大いに私を助けてくれました）など、日本語の特徴がありつつ、標準的な中国語から逸脱した表現は日本滞在歴の比較的長い JSL-2 の発話にしか見られないことから、第二言語環境での滞在歴が言語逆行転移に影響していることが実証された。よって、滞在歴が長くなればなるほど、単にインプットにさらされる機会が増えるというだけでなく、より幅広い社会的活動により深く巻き込まれ、第二言語からの影響を強く受けるようになっていくことが推測される。

④ 教室指導と教科書

教室では文法項目の説明や誤りに対する訂正があり、メタ的言語知識まで習得される特徴があると考えられている。一方、言語学習のインプットはまず教科書から始まり、特に初級の段階において教科書が重要な学習指標としてみなされている。しかし、教室指導や教科書により、訓練上の転移⁴が起ってしまい、ステレオタイプの理解が強化可能性もあると指摘している (Saito & Beecken, 1997)。本研究において、日本語 L2 使用者が母語で依頼するときに「给您添麻烦了」（お手数をおかけしました）「拜托了」（お願いします）を使用したのが、日本語環境に長期間滞在することによって、「お願いします」がパターン化したということ以外に、教科書からの影響も考えられる。また、日本語 L2 使用者が感謝を表すとき、「对我有很大帮助」（大変助かりました）のような主語を省略した発話が観察された要因として日本語の文において主語が無用であることが日本語教師によって強調された可能性も考えられる。よって、教室指導と教科書も言語逆行転移に影響する要因の一つと言えよう。さらに、教室指導や教科書では特定の状況のためのモデル文や目標言語の特徴を教えることはもちろ

³ 主語・目的語・動詞という語順の類型。

⁴ 言語項目の提示のされ方、練習の仕方によって引き起こされる誤り。(Richards, Platt&Platt 1992: 177)

ん重要であるが、それぞれの状況で使い得る表現や言語のバリエーションを認識することも大切だと思われる。

以上、第二言語レベル、母語と第二言語の類似点、第二言語環境での滞在歴、教室指導と教科書の方面から、言語逆行転移を影響する要因について論じた。また、本稿では、中国語を母語とする日本語 L2 使用者が依頼する際、L2 の日本語が母語の中国語に対する影響が証明され、L2 習得においては、単なる母語から L2 の転移という現象にとどまらず、L2 が母語に影響を及ぼすこともあり、脳内に共存する言語の作用、つまり複数言語の双方向的な相互作用の可能性を示唆した。この点は、「複数言語を完全に分離した別々の言語として捉えるべきではなく、脳内で相互に作用しながら、統合された一つの体系を形成する存在である」というマルチコンピテンスを示す結果となった。

6. まとめと今後の課題

本研究では、中国語を母語とする日本語 L2 使用者が依頼場面での言語逆行転移の実態を明らかにした。中国語を母語とする日本語 L2 話者は母語の中国語で依頼する際、予告ストラテジー、間接依頼ストラテジー、負担軽減ストラテジーやお詫びストラテジーを多用するようになり、母語の中国語が L2 の日本語から影響を受け、言語逆行転移が発生した可能性を指摘した。これらの調査結果をもとに、言語逆行転移を影響する要因として、第二言語レベル、母語と第二言語の類似点、第二言語環境での滞在歴、教室指導と教科書からの影響の4つを挙げた。また、教師や教科書編集者は言語バリエーションを大切にすべきことを主張した。

本研究は横断研究であり、グループ間の依頼表現の比較が行われた。第二言語学習と滞在歴が母語に与える影響を検証するためには、個人あるいはグループ自体の第二言語発達過程において、いつ、どのような影響が表れるのかを追跡調査するという縦断的研究が必要であると思われる。また、本研究では、「レポートの作成に必要な本を借りる」といった学生がよく遭遇しそうな場面を設定し、多肢選択アンケートと談話完成テストを組み合わせて作成した質問紙で調査を行ったが、あくまで筆者の意図に基づいた調査方法で行われたため、より自然なデータを取得するため、できるだけ日常生活の中での自発的な言語使用・行動を研究の対象としていきたいと思う。

7. 研究意義

中国語を母語とする日本語学習者の数は年々増え続け、日本語を学習する経験のない言語共同体の内部では起こり得ない、さまざまな事象が観察されている。本研究では中国語を母語とする日本語 L2 話者の依頼表現に着目し、第二言語が母語にもたらす語用論的影響の可能性を指摘したうえで、言語逆行転移に影響するいくつかの要因を提示した。

本研究により、まだ報告の少ない分野である第二言語から第一言語への言語逆行転

移の実例を挙げた点や言語逆行転移を影響する要因について説明した点において、意義があると考えられる。また、中国語を母語とする日本語L2話者の第一言語の使用において、中国語母語話者とも、日本語母語話者とも異なる特徴が見られ、L2話者の独特さが証明された。日本語を学ぶ私たちは、いつまでたっても日本語母語話者のレベルに到達できない学習者ではなく、母語に加えて日本語を知っているユニークな存在として自分を捉えるべきだと考えている。

参考文献

- 佐野富士子・岡秀夫・遊佐典昭・金子朝子 (2011) 「学習者言語」『第二言語習得—SLA 研究と外国語教育』5, 133-157.
- 関口剛司 (2007) 「日本語による依頼表現の一考察—日台異文化間コミュニケーションの視点から—」『龍華科技大學報』23, 99-117.
- 中野洋・張建華・林翠芳 (1997) 「中国人の日本語文章における中国語の影響」『言語処理学会第3回年次大会 発表論文集』B2-1.
- マツモト, D・工藤力 (1996) 『日本人の感情世界—ミステリアスな文化の謎を解く』誠信書房.
- 山田恵美子 (2010) 「第二言語が母語に与える影響—断り発話の分析から—」NEAR conference proceedings working papers, NEAR 1, 1-15.
- Blum-Kulla, S. (1990) You don't touch lettuce with your fingers: Parental politeness in family discourse. *Journal of Pragmatics*, 14 (2), 259-288.
- Blum-Kulla, S., & Sheffer, H. (1993). The metapragmatic discourse of American-Israelies at dinner. In G. Kasper & S. Blum-Kulla (Eds.), *Interlanguage pragmatics* (pp. 196-223). Oxford University Press.
- Cenoz, J. (2003). The intercultural style hypothesis: L1 and L2 interaction in requesting behaviour. In V. Cook (Ed.), *Effect of the second language on the first* (pp. 62-80). *Multilingual Matters*.
- Cook, V. J. (1991). The Poverty-of-the-stimulus Argument and Multicompetence. *Second Language Research*, 7 (2). 103-117.
- Cook, V. J. (2003). *Effects of the Second Language on the First*. *Multilingual Matters*.
- Kasper, G., & Schmidt, R. (1996). Developmental issues in interlanguage pragmatics. *Studies in Second language Acquisition*, 18 (2), 149-169.
- Saito, H., & Beecken, M. (1997). An approach to instruction of pragmatic aspects: Implications of pragmatic transfer by American learners of Japanese. *The Modern Language Journal*, 81 (3), 363-377.

(き ゆか・東京都立大学大学院博士前期課程修了)